小結

劉向の五行説は、それ以前の五行説に較べ、易を多用することを特徴とする。説卦伝や消息卦を用いて『洪範五行伝』の文言や『春秋』の災異を説明し、また説卦伝に基づいて、木徳伏羲氏から相生の順に徳運が巡る新たな五徳終始説を唱えた。このように劉向は易の論理によって、五行の様々な運行・配当を説明した。これは、易を五行説の中心原理に位置付け、易を軸として諸五行説を整理・体系化する試みと謂えよう。

このような劉向の試みは、その息子劉歆によって更に推し進められる。劉向は易によって経学に於ける五行説の部分を整理したが、劉歆は更に、易を根本原理として経学そのものを体系付けようとした。以下は、『漢書』巻三十 芸文志 六芸略の小序に引かれる、劉歆『七略』の語である。

六藝之文。樂以和神、仁之表也。詩以正言、義之用也。禮以明體、明者著見、故無訓也。書以廣聽、知之術也。春秋以斷事、信之符也。五者蓋五常之道、相須而備。而易爲之原、故曰、易不可見、則乾坤或幾乎息矣。言與天地爲終始也。至於五學、世有變改、猶五行之更用事焉。

六芸の文は次の通りである。『楽経』は神を和す方法であり、仁の顕れである。『詩経』は言葉を正す方法であり、義の働きがある。『礼経』は姿形のあり方を明らかにする方法であり、明らかにしているのだから（その効能は）既にはっきりしており、そのためこの経典についての解釈は不要である（つまりその名の通り、五常の礼に当たる）。『書経』は先賢の言葉を広く聴く方法であり、知の術である。『春秋』は事柄の善し悪しを評価する方法であり、信の顕れである。以上の五者は五常の道であるから、必ず全てを備えなければならない。一方、『易経』はそれらの根源である。故に、「もし易の働きが見えなくなれば、乾坤（天地）はほぼ終息である」（『周易』繫辞伝上）と言う。つまり、易は天地と終始を共にするのである。一方、その他の五学は、時代ごとに変化がある。五行が交代しながら役割を果たすようなものである。

ここでは、易を不易の理法と見なし、諸経学の根源と説いている。劉向説に較べ、易の地位が格段に高く引き上げられている。

劉向・劉歆はいずれも易学の顕彰・五行説の体系化を推し進め、その大きな方向性が共通するのではあるが、ただ、両者の具体的な説を較べると、その差異は小さくない。五行説の体系化に於いて、劉向が専ら易の理法を用いて諸物の配当を関連付けたのに対して、劉歆が五行の配当について易を用いた例はあまり見出せない。劉歆が実際に五行の配当を整理する際に用いたのは、易ではなく専ら月令であった。この点で、劉向と劉歆の説は、大きく異なる。

劉歆は易を極めて高く評価し、諸経学の根幹と見なしたのに、五行の具体的な配当を整理する際には易を用いない。これは何故だったのであろうか。おそらく、劉歆は易を抽象的な数理に関する理法と考え、五行の分類という具体的な事物に関する規則とは区別したからであろう。

次章では劉歆による五行説改造と、易をどのような方面で用いたかについて、詳しく論じる。